

‘スケープゴート’に関する臨床心理学的一考察

廣澤 愛子 (教育臨床学講座)

(2003年11月28日受理)

A Study on ‘Scapegoat’ From a viewpoint of Clinical Psychology

Aiko HIROSAWA (Department of Clinical, psychological and Practical Studies in Education, Aichi University of Education)

要約 スケープゴートとは、ある集団に属する人がその集団の正当性と力を維持するために、特定の人を悪者に仕立てあげて攻撃する現象を指す。少数民族の迫害（ホロコーストなど）はこの一例であるし、より卑近な例を挙げると、学級におけるいじめや家庭における虐待も同様であろう。

従来、虐待やいじめについては「トラウマ」という視点から論じられることが多いが、本論では、「スケープゴート」という視点から論じた。そして、虐待やいじめの被害者(児)の心理療法を通して筆者が感じたことを中心にして、スケープゴートにされるという経験が当人にどのような影響を及ぼし、その中で彼らがどのように自らのアイデンティティを築いていくのかについて考察した。

具体的には、スケープゴートにされるという経験が及ぼす影響について、①スケープゴートとの同一化、②実存的な孤独、③「集合的な影」を見続けること、の3点から論じた。そして、彼らが自ら築いていくアイデンティティについて、①辺縁を主体的に生きること～スケープゴートからトリックスターへ～、②基盤のなさを受け入れること、③「影」との新しい関係、の3点から論述した。

Keywords : スケープゴート、影、トリックスター

1. はじめに

ある集団に属する人々が、その集団の正当性と力を維持するために特定の人を悪者に仕立て上げて攻撃する現象を‘スケープゴート’と呼ぶ。つまり、「悪や間違っただけで同一視でき、その責を負わせ、共同体から追放することのできる人物ないし人々を見つけ出すこと」によって、残りのメンバーが「自分には罪がなく、集合的な行動規範と調和(合致)している」(Perera, 1986)と感ずることができるようになる。彼らはもっともらしい大義名分のもとに自分たちの影を特定の人物に投影して攻撃することで、うまく悪(影)を浄化することができたと感じているかもしれない。しかしそれは、「一見、倫理的な振る舞いのように装いながら、実際には刑罰、拷問、威嚇といった仕方で、影が存分に暴れることができるように、さまざまな形で影の側面に譲歩」(Neumann, 1948)してしまっていると言える。少数民族の迫害(ホロコーストなど)はこのようなスケープゴートの典型的な例であろうし、より卑近な例としては、学級内におけるいじめや家庭内における虐待も同様であろう。

筆者がスケープゴートという現象について注目するようになったのも、被虐待児やいじめの被害者の心理療法を担当したことがきっかけである。彼らは、スケープゴートの被害者であり、それによって、想像を越えるような大きなところの傷を負っている。

本論においては、‘スケープゴートにされる’という体験—すなわち、影を投影されるという体験—が彼

らにどのような影響を及ぼすのか、そして、彼らがその体験をどう受け止めて折り合いをつけ、これからの生へと繋いでいくのかについて論じていきたいと思う。つまり、スケープゴートの被害者の側から見た事象について、臨床心理学的観点から論じていく。その際、実際の臨床事例を提示することができれば考察も進めやすいのだが、プライバシーの問題があるためにそれは避けざるを得ない。したがって、被虐待児やいじめの被害者に対する心理療法を通して、これまで筆者が感じてきた事柄をいくらか取り上げ、文献などを引用しながら臨床心理学的な視点から論じていきたいと思う。今までのところ、臨床心理学的な観点からの‘スケープゴート’についての研究は、Perera (1986)の「スケープゴート・コンプレックス」の研究を除いては、筆者は寡聞にして知らない。しかし心理療法の場面に、虐待やいじめの被害者が来談される機会が増えていることを考えると、スケープゴートにされるという体験がその当人に及ぼす影響とそこからの治癒プロセスについて考察することは必要だと思われる。

ちなみに、虐待やいじめと言えば一般的にトラウマという視点から論じられる傾向があると思うが、‘スケープゴート’という視点から捉えることで新たに見えてくることも多く(廣澤, 2003参照)、また、トラウマという視点から論じられていることがらと重なるところもある。

本題に入る前に、これまでのところでさりげなく用いてきた言葉—影—の概念について、以下に考察を加

えた上で論をすすめたいと思う。

2. 「影」の概念について

影の概念について明確に述べることはとても難しい。しかし、Jung心理学の知見をもとに、少しでもその意味するところを明らかにすると、まず、影は「個人的な影」と「集合的な影」に分けることができる。

「個人的な影」とは、ある個人にとって、これまでの人生の中で注目していなかった（あるいは、その価値を認めていなかった）考え方や人生観を指す。

このことを河合（1976）は、ある若い女性の夢を取り上げながら説明している。その夢とは、‘ボーイフレンドから手紙がこずに心配しているが、自分とは何もかもが正反対で、あまりいいように思えない友人Aが、自分が手紙をもらうのが当然だという顔つきをしている’ というものである。夢に出てきた友人Aは、この女性がこれまで良しとしてきた生き方や価値観とは相容れない傾向を表しており、これまであまり注目していなかった側面を表す。つまり、友人Aは、この女性の「生きられなかった半面」を表しているのであり、それをJungは、その人にとっての「影」であると考えたという。そして、この夢の意味するところについては、「今までの生き方にAのような生き方を少しつけ加えていくことが、ボーイフレンドとのつながりをスムーズにするのではないかと考えられる」（河合、1976）、と言う。しかし、このボーイフレンドを、実際のボーイフレンドと捉えるのか、あるいは、友人Aを現実の人としてではなくこの女性の影のイメージと捉えたように、この女性の内的なイメージ（異性像）と捉えるのかという問題が生じてくることも言及されている。

河合（1976）の記述からも明らかなように、「個人的な影」と言う場合、それはその個人にとって生きられなかった半面を表しているのだから、そこに目を向けて少しずつ取り入れていくことが、その人の人生をより豊かにしていくことに繋がる可能性があるだろう。もちろん、安易に取り入れようとしたら影に押しつぶされてしまうかもしれないし、逆に、取り入れたつもりになっても本当にそれを掬い取ることが出来ていない場合もある。影に目を向けるというのは大変しんどいことであるし、それは機が熟さなければなされないことだとも言えるように思う。それゆえ、「影」を自分のものとして認めずにはできるだけ避けようとして「投影」という機制がよく用いられることも指摘しておきたい。つまり、自分の影を他者に投影して、その他者を攻撃するわけである。「投影の引き戻し」が行われると、他者に投影していたものが実は自分自身の影だったと気づくことができる。

次に「集合的な影」について述べるが、スケープゴ

ートという現象は、この「集合的な影」と関係している。「集合的な影」とは、Collective Shadowの訳であり、「普遍的な影」と呼ばれることもあるが、ここでは「集合的な影」という言葉を用いたい。「集合的な影」とはある個人にとっての「影—その個人にとっては、認めがたいものであり悪とすら感じられるもの—」ではなく、人間一般（あるいは大多数の人）にとって、それが自らの根底にも存在していると自覚するのが恐ろしいので蓋をしている、人間の「悪」を表す。ただし、「集合的な影」にもさまざまなレベルがある。つまり、「悪」には相対的な悪と絶対的な悪があるように思う。ごく日常的なところで例をあげるとすれば、嘘は一般的には良くないこととされるが、「嘘も方便」ということわざがあるように、嘘が必要だったり、それが善行と見なされるような場合もある。また、文化や価値観の違いで、善悪の判断が異なることもよくある。そしてPerera（1986）も示唆しているように、「集合的な影」の中に含まれている、文化的に規定された相対的な「悪」は、意識化されれば価値を回復して集団を豊かにしてくれるものにもなると言える。一方、絶対的な悪もやはり存在し、それは「恣意的ですらある底知れぬ破壊性をそなえ……（中略）……強制収容所を作り出すエネルギーとも関連している」（Perera,1986）のものであり、戦争や民族紛争を通して繰り広げられる殺戮とも関係しているだろう。筆者は、虐待やいじめの被害者が受けた傷は、この‘絶対的な悪—底知れぬ破壊性をそなえ、強制収容所を作り出したり戦争を引き起こしたりするエネルギーでもあり—’と深く関係しているように思う。なぜなら、スケープゴートの作り手側の虐待やいじめという行為はまさに、人間の「集合的な影—絶対的な悪に通じるもの—」が形になった結果だからである。

しかし意識しておかなければならないのは、スケープゴートという現象そのものは、特別な人間が引き起こす特別な現象ではないということである。虐待やいじめというと極端な印象を与えるかもしれないが、家族や学級、会社などあらゆる集団において、大義名分のもとにその集団の影を特定の人になすりつけて、大多数のものが安易な幸福を手に入れているという現象は至る所で見られる。そして、Perera（1986）も言うように、集団におけるスケープゴート現象は、安易な解決を全く許さないものである。

「影」というものは、それが「個人的な影」であれ「集合的な影」であれ、自分自身のものとして意識することはしんどいことである。それゆえ、先ほど少し触れた「投影」の機制がよく用いられる。しかしそれは、集団においては、スケープゴート—つまり、「集団の影の肩代わり現象」（河合、1976）—という形で、影を処理しようとする動きにつながっていく。つまり、「集団が持つ影の投影」が引き起こされるのであり、

それは集団の外部に向けられることもあれば、集団の内部にその対象を見つけ、そこに向けられることもある。ナチスのユダヤ人迫害は前者に当てはまり、国民の不満など集団が抱える「影」を、ユダヤ人を「悪」に仕立て上げそこを攻撃することで処理しようとした。そして、虐待やいじめという現象は後者に当てはまると言えるだろう。つまり、集団の内部にスケープゴートの対象を作り出し、その集団が持つ影をそこに投影して攻撃するのである。

本論の「1. はじめに」において、虐待やいじめの被害者はスケープゴートの被害に遭っていると述べたが、それは、ひとつには、集団（家庭や学級）が持つ影の投影を引き受けさせられているという意味であり、その集団が持つ影の肩代わりをさせられている、という意味である。また、もうひとつは、虐待やいじめという行為そのものが、強制収容所をつくり出すような人間の絶対的な悪—すなわち、集合的な影—に通じており、彼らとその犠牲になっているという意味である。

次章において、スケープゴートの被害者の側から見た事象を臨床心理学的観点から論じていくが、その順序としては、まず、スケープゴートの被害に遭うことによって彼らがどのような影響を受けるのかについて、「3. 『スケープゴート』にされるという経験が及ぼす影響」と題して、3つの観点—①スケープゴートとの同一化、②実存的な孤独、③「集合的な影」を見続けること—から述べる。次に、そのような影響（傷つき）を受けて、彼らがどのようなアイデンティティを自ら築いていくのかについて、「4. 『スケープゴート』との同一化から逃れるプロセス」と題して、3つの観点—①辺縁を主体的に生きること～スケープゴートからトリックスターへ、②基盤のなさを受け入れること、③「影」との新しい関係—から描写したいと思う。

また、以下に考察をすすめていく中で、これまで筆者が担当した被虐待児やいじめの被害者の心理療法において、彼らが語った言葉などを断片的に引用するが、その中には、被虐待児が心理療法のなかで繰り返し「ごっこ遊び」や「物語」が含まれている。一般的に子どもの心理療法においては、言葉によるカウンセリングではなく遊びを媒体にしたプレイセラピーが実施されることが多い。そしてその中では、ごっこ遊びや物語作成などがよくなされる。心理療法の中で展開されるごっこ遊びや物語には、その人が受けたところの傷や、本人がそれをどう受け止めてこれからの生を紡いでいくか、ということが象徴的に表現されている。物語を作る中で本人自らが癒されてゆき、物語の作成とパラレルに、日常場面においても、その人の抱えている問題が解消され、今後のあり方が定まっていくことはよくある。したがって、本論において引用される

物語も、「単なるお話」として捉えるのではなく、そこに表現されている内容は、その人自身のこころの傷の在り様や、本人がそれをどう受け止めており、どう今後に繋げていったのかということが象徴的に表現されている、と考えていただきたい。物語を読み解いていく作業は、その人のそのときのこころの状態を理解することに繋がると言える。

3. 「スケープゴート」にされるという経験が及ぼす影響

(1) スケープゴートとの同一化

虐待やいじめの被害者は、彼らにとっては何のいわれもない罪を背負わされ、集団から排除される。自身に何かしらの咎があれば納得できることもあるかもしれないが、それが無い。あるいじめの被害者は、「なんかうっとうしい、見ててむかつく、と言われていじめられた。でも、それって私の責任ですか?」と語った。一方、虐待を受けた子どもたちは、「自分が悪い子だから」「ダメな子だから」虐待されるのだと本当に信じていることも多い。それは、Herman (1994) が言うように、自分が悪いから虐待されるのだと思えば、努力してよい子になりさえすれば虐待されなくなるかもしれないと思うことができ、希望と有力感を保持できるからかもしれない。

いずれにせよ、Perera (1986) も指摘しているように、スケープゴートの役割を背負わされた人は、自分たち自身を「『間違った』『醜い』『悪い』といった烙印をおされたものと同一化している」ことが多いように思う。実際、筆者の臨床経験においても、虐待を受けた子どもの心理療法のなかでは、悪人や罪人、流人—例えば、泥棒、ヤクザ、乞食など—のイメージがよく出てきて、彼らはこれらのイメージに自分自身を同一化している印象がある。悪人や罪人、流人とは集団において忌み嫌われることが多く、集団からの排除を余儀なくされる存在であるが、心理療法においては、これらの対象に自らを同一化している彼ら自身もそれらを忌み嫌い、排除しようとしている印象がある。

つまり、スケープゴートにされるという体験を通して彼らが受ける影響の一つは、集団から排除されるものとして烙印をおされた存在に自らを同一化—スケープゴートと同一化—し、同時にそれらを忌み嫌うことで、深い自己否定感を抱えているということである。

心理療法においては、このような彼らのアイデンティティがどのように変化していくか、あるいは、悪人や罪人、流人といったものへ投影された自己イメージを彼ら自身がどう受け入れて折り合いをつけていくのか、それを見守っていくことが決定的に重要であると思われる。彼らが自ら築いていくアイデンティティがどのようなものであるかについては、次章（特に、〔1〕 辺縁を主体的に生きていくこと～スケープゴ

トからトリックスターへ〜」)において述べる。

(2) 実存的な孤独

虐待を受けた子どもは、何のいわれもなく自分が生まれ出てきた源(母や家族)から徹底的に拒絶される。生まれて間もない赤ん坊が母親から無条件に受け入れてもらえるそのときに、見捨てられるという体験をするとと言える。自分が生まれ出てきたその母体からの拒絶は、「自分が存在することへの処罰」(Perera,1986)と感じられてもおかしくはない。

いじめの被害者も、多くの人が帰属感を持つことのできる学校や会社から排除され拒絶される。あるいじめの被害者は「私には母校がない(傍点筆者)」と語った。彼女は、母校と呼べるような、ある種のこころの拠りどころつまり、基盤のようなものが自分にはない、と述べているように筆者には感じられた。

自分自身がこの世へと生まれ出てきたルーツを確かなものとして感じられず、どこにも所属することができないという感覚を持っている状況を、Perera(1986)は、「荒野の流浪」と表現している。彼女によると、スケープゴートと同一化している人々にとって、荒野とは、「自らが実存的に経験している深刻な疎外と流浪」をイメージさせるものであり、心理学的には、彼らの「無感動性、無意味感、見捨てられることへの強い恐怖心、……(中略)……彼らの寄る辺のなさ・家郷喪失……」などを表しているという。

虐待やいじめの被害者は、内的にも外的にも自分たちを支えてくれるものがなく感じているように見受けられる。多くの人が当たり前のように得ている基盤(家族、学級、社会)が欠けているという前提のもとに、彼らは生きている。あるいじめの被害者は、「仲間に入れてもらうためなら、どんなことでもした。本当に、居場所がなかったから。でも結局無駄だった。そうやって人の言いなりになって仲間に入れてもらおうと必死になる自分に自己嫌悪だった。もう生きられないと何度も思った」と述べた。

このような想像を絶する実存的な孤独を虐待やいじめの被害者は抱えており、それは自身を支える基盤(土台)のなさに由来するところが大きいように思う。彼らは、自身の存在をこの世に定位できず、宙に浮いたような極度の不安定感を抱えているが、そのような実存的な不安定感とどう向き合っていくのか。あるいは、基盤のなさという前提をどう受け止めて自身の生へと繋いでいくのかということが、彼らがスケープゴートとの同一化から脱却し、自らのアイデンティティを築いていくのに大きな影響を及ぼすと思われる。このことについては、次章「(2) 基盤のなさを受け入れること」において述べる。

(3) 「集合的な影」を見続けること

虐待やいじめに関する現状がすべて明らかになることはないであろうし、隠蔽された中で、ひそかに行われている虐待やいじめは数多くあると思う。しかし一方で、近年、虐待やいじめのすさまじさが明らかになりつつある。激しい暴力—ときには死に至るまでの暴行—が行われることもあり、兄弟や姉妹が虐待によって死亡しているケースもある。いじめにおいても、その恣意的で陰湿ないじめが、その人を死に至らしめることもある。

そのような凄惨な現状を前にするとだれしもが目を覆いたくなるし、自分とは関係のない出来事だと考えたくなるが、このような凄惨さこそが、「2. 影の概念について」でも触れた、人間の「集合的な影」に属するものであると感じられ、人類に共通した「悪」に通じるものだと考えられる。

「2. 影の概念について」においても少し触れたように、虐待やいじめの被害者は、スケープゴートという形で、その集団が持つ影の肩代わりをさせられて—集団が抱えている問題を、お前のせいだとすりつけられて—傷つけられると同時に、人間が持つ「集合的な影」の目撃者でもある。そして、この「集合的な影」の犠牲者であり目撃者でもあるということが、彼らのアイデンティティに大変大きな影響を及ぼしているように感じられる。

Perera(1986)も指摘しているように、スケープゴートとの同一化に陥っている人々は、「集合的な影」に対して、あまりにも早急に過度な個人的責任を負おうとする傾向があり、「スケープゴートにして救世主」という自我肥大したアイデンティティを持つことが知られている。Herman(1992)も、虐待を受けた人が、自分の自己価値観を保持するために、「自分は殉教者として選ばれた聖女だ」(Herman,1992)というアイデンティティを持っていたことを指摘している。このような自我肥大したアイデンティティ、あるいは過剰に影を背負おうとする態度は、スケープゴートとの同一化から脱却していくプロセスにおいて捨て去られる必要がある。

しかし、また一方で、虐待やいじめの被害者がこのような自我肥大による「救世主」像とは根本的に異なる態度で、人間の「集合的な影」を見据えようとする姿に、筆者は心理療法の中で時に会おう。ある被虐待児は、「戦争、なんで起こるん?」と真剣に問い、そのときの彼女は、集合的な影を過剰に背負おうという自我肥大した様子ではなく、人間がどうしてもとめることの出来ない、集合的な影がその背後にある戦争というものを、しかと見据えているようだった。

つまり、「集合的な影」の目撃者であり犠牲者でもあるという経験によって、彼らは過剰に影を背負い、スケープゴートにして救世主という自我肥大したアイデンティティを有する傾向があるが、また同時に、

「集合的な影」が引き起こす事態をしかと見据える態度を見せることがある。そして「影」に対してのこのような態度は、スケープゴートとの同一化から逃れるプロセスにおいて徐々に変化し、新たな形で、彼らのアイデンティティに組み込まれていく。そのことについては、次章の「(3) 影との関係」において詳述する。

4. 「スケープゴート」との同一化から逃れるプロセス

前章において、スケープゴートの被害に遭うという経験が当人たちにどのような影響を及ぼすのかについて、3つの観点—①スケープゴートとの同一化、②実存的な孤独、③「集合的な影」を見続けること—から述べた。本章においては、これらの影響を受けて、彼らがどのようなアイデンティティを自ら築いていくのかについて、3つの観点—①辺縁を主体的に生きること～スケープゴートからトリックスターへ～、②基盤のなさを受け入れること、③「影」との新しい関係—から述べる。

(1) 辺縁を主体的に生きること～スケープゴートからトリックスターへ～

スケープゴートとの同一化を強いられた被虐待児の心理療法においては、集団から排除された存在—罪人・悪人・流人といったイメージ—がよく出てきて、彼らはこれらのイメージに同一化するとともに、それらを忌み嫌い、深い自己否定感に陥っていることを先に述べた。

心理療法において、ある被虐待児が展開した物語では、このような排除された存在—一例えば、泥棒—は、徹底的に攻撃されて排除され、いわゆる既成の価値観のもとに断罪された。つまり、「どろぼうは、人のものをぬすむんだから悪い奴だ。除けものにされて当然だ」と言って、何度も泥棒をなぐった。おそらく彼女の価値観の中でも泥棒は、排除されるべき存在を象徴していたのだろうし、又それにもかかわらず、彼女は泥棒に象徴されるような排除された存在というアイデンティティを押し付けられ、その役割を担わされたのだろう。それゆえ、彼女は心理療法において、自分の欲求を口に出すことが出来るようになるにつれ、物語の中で、「泥棒」を攻撃し、そのアイデンティティを「いやだ」と言って拒絶し排除したものである。

しかし日常場面において、スケープゴートの被害者はどんなにその役割が嫌でも、「いやだ」ということが出来ないことが多い。いや、「いやだ」という選択肢がなかったのであろう。個としての自分の欲求を表現することなど許されたことがなく、集団から押し付けられた役割を生きさせられてきたと言える。したがって、彼らにとって「いやだ」を主張することは、多くのエネルギーと勇気のいる大変な作業である。しかし、心理療法のプロセスのなかで、彼らが少しずつ有

力感を身につけていくと、自身の欲求が少しずつ形になり始める。すると、乳幼児がその発達過程において2歳くらいで「いや」という自己主張をし始めるのと同様に、彼らも「何を受け入れることができ、何を受け入れられないか」という自分の欲求を表現するようになる。そしてそれが表現出来た時が、スケープゴートとの同一化から少し脱却する瞬間である。

つまり、物語においては「泥棒」という押し付けられた役割を「いやだ」と拒絶した瞬間に、「主体性」の獲得への一歩を踏み出したと言えるのである。

しかし、逆説的だが、そのような形でこれまで押し付けられてきた「排除された存在」というアイデンティティを一旦拒絶すると、逆にそのような排除されたものの存在価値に気づくようになっていく。先の被虐待児の心理療法において、物語はさらに次のように展開した。

すなわち、物語の中で、彼女はとことんまで泥棒を拒絶し攻撃した。その結果、行き場をなくした泥棒の方がとうとう生きることを諦めて自死の道を選ぼうとする。するとその瞬間、散々に泥棒を追い詰めていた彼女が、今度は泥棒の救出に向かう。すんでのところ泥棒は命拾いする。

泥棒は、彼女にとって押し付けられたアイデンティティであり、それを拒絶し「いや」を主張することは、スケープゴートとの同一化から逃れるために必要不可欠なステップであっただろう。しかし同時に、泥棒を排除し拒絶しきるということは、そこに自分のアイデンティティを投影している彼女にとっては、自分自身を根底から否定することを意味する。その意味で、自死を選ぼうとした泥棒を救出したことは、自分自身を否定するのではなく受け入れたことを意味すると言えるだろう。

このあと物語では、九死に一生を得た泥棒が懲りずに何度も家に侵入するようになる。そしてその際の泥棒は生き生きとしていて、自らの意思で自由に走り回り、警察に追われてもスルリと逃げ出しては再び侵入する狡猾ないたずら者、という印象であった。そして、彼女はそんな泥棒に振り回されつつも、よく見ると泥棒がプレゼントを持っていることに気づくのである。そして最後には、泥棒からプレゼントをもらい、泥棒と抱き合い和解するのである。ここで物語は終了する。

この物語から、泥棒にも価値（プレゼント）があるということが伝わってくる。泥棒という排除された存在に自らを同一化させられていた彼女が、それを自分で拒絶し、逆説的だが、今度はそれを主体的に受け入れ、その存在価値を見出していく。ここで強調しておきたいのは、泥棒というアイデンティティを捨てるのではなく、それを主体的に受け入れることを選ぶという点である。スケープゴートと同一化している虐待やいじめの被害者の心理療法において、まずはスケープ

ゴートとの同一化から逃れることが大切であるが、この被虐待児の物語に見られるように、それは泥棒というアイデンティティを捨て去ることではないのである。このことは大変重要ではないであろうか。心理療法家は、つい、より集団に受け入れられるポジティブなあり方を求めがちである。つまり、「泥棒というアイデンティティを捨てること」を求め、集団の辺縁ではなく中心へと戻ることを求めてしまうかもしれない。しかし、それが馴染まない場合もある。むしろ、徹底的に拒絶され攻撃される対象であった泥棒が、より闊達で自由に走り回る泥棒になったように、同じ泥棒でありながらその様相が変化するという形で、心理療法は展開していく。つまり、集団の辺縁を、排除された存在として苦しみながら漂うのではなく、アウトサイダーとして、自由に、より主体的に、そして飄々と生きていくというイメージ。そういう在り方を獲得していくことが、スケープゴートとの同一化に苦しんでいる人々が、そこから逃れると同時に自らアイデンティティを確立することに結びつくのではないだろうか。Perra (1986) も、スケープゴートと同一化した人は、荒野に放り出されたような実存的孤独を味わっているが、逆説的だがこの荒野こそが、彼らが最終的に自己を確立する場でもある、と述べている。

辺縁を主体的に生きていくアウトサイダー（先の物語でいうところの、狡猾でいたずらものという印象の泥棒など）というイメージは、虐待やいじめを受けた子どもの心理療法の終盤において、ひとつの自己イメージとしてよく出てくる。そしてこれらのイメージは、筆者にトリックスター（道化）を連想させる。

トリックスターとは、多くの神話で活躍する‘いたずらもの’‘道化’であり、Jung (1956) は、トリックスターの性質を多く持っているメリクリウスを例にあげて、その特性を「半ば面白半分、半ば悪意（毒！）のある狡猾な悪戯の性癖、変身の能力、獣神的な二面性をもち、あらゆる種類の拷問にさらされ、そして一最期に重要なことだが一救い主の像に近づく」と説明している。

ところで、「救い主の像に近づく」という点に関しては、河合 (1976) も、道化は「徹底的な影の世界の演出によって、宇宙的な全体性を回復しようとする死と再生の秘儀（傍点筆者）」を行っており、道化自身は「初めから終わりまで変わることがなく、そのまま」であり、「自分の変化は全く問題外」だが、「これこそ真の救済者の姿に近い」と述べている。つまり、道化とは、自身自身の変化（成長）は全く考えず、「影の演出」によって場全体を浄化し、更新することを目指すと言える。いたずら者でありながら、一方では、影の浄化—あるいは場の更新—をもたらすというトリックスターのイメージ……。

筆者が、彼らがスケープゴートとの同一化から逃れ

るプロセスにおいて自ら築いていくアイデンティティにトリックスターを連想したのは、先の泥棒のイメージに見られるような、いたずら者という印象からだけではない。むしろ、ここで述べたようなトリックスターの‘救済’という側面も、彼らが自ら築いていくアイデンティティに含まれているように感じていた。つまり、スケープゴートという形で「影」を背負わされていた彼らが、スケープゴートとの同一化から脱却した後でさえ、背負わされるという受身な形ではなく、より主体的に「影」の浄化に関ろうとする姿勢を感じたのである。このことは、彼らのアイデンティティにとって大変重要な側面であると感じられるので、本章の「(3) 『影』との新しい関係」において詳しく述べたいと思う。

いずれにせよ、「トリックスター（道化）」とは、スケープゴートとの同一化に苦しむ人々が、スケープゴートとの同一化から逃れて新たに作り上げていくアイデンティティの一端を生き生きと表しているように思われ、心理療法においては、これらのイメージを大切にすることが必要だと感じられる。

(2) 基盤のなさを受け入れること

虐待やいじめの被害者が、生まれ出てきたその源（母や家族）や帰属感を持てずの学級や会社から見捨てられているということ。「3. 『スケープゴート』にされるという経験が及ぼす影響(2)実存的孤独」において指摘した。このような基盤のなさを彼らは抱えており、実存を脅かされるほどの孤独感と不安定感がそこにはある。

心理療法においても、この「基盤のなさ」は最後まで貫かれている印象がある。ある被虐待児の心理療法の最終回において作られた箱庭は、中心がポッカリ空いており、何も無かった。まるで、これまでの心理療法での営みが幻となって、水泡に帰するかのようだった。この「空虚感」「欠落感」は、筆者のこれまでの少ないながらも臨床経験においても、虐待やいじめの被害者の心理療法において共通している印象がある。さらにまた、「あらゆるものが定位せず、しっかり根付かない」印象もあった。しかし、前節で示したように、スケープゴートとの同一化に苦しんでいた人は、集団の中に帰っていくことを目指すのではなく、トリックスター的存在というアイデンティティを主体的に選び、辺縁を生きていく。彼らは、スケープゴートにされたという経験によって刻み込まれた、消すことの出来ない「傷痕—stigma—」を直視し、それを背負って生きることを選ぶ。このようなアイデンティティの確立には、その前提条件としてのみならずアイデンティティ確立後さえ、「空虚感」「欠落感」「根付かなさ」がある種の位置を占めるのは当然であろう。

秋田 (2001) は、「Disfigured Hero」という概念を

提唱している。日本語に訳すと、「異形の英雄」「欠落のヒーロー」「傷を生きる英雄」といった意味になるそうだが、「いわゆる個性化においては、全体性が指向されるが、“Disfigured Hero元型”が働く時、そこに全体性への指向はない。神ならぬ、欠けた人間が、その欠落のままに生き抜こうとするのがDisfigured Heroであり、『彼』は『癒されぬ個性化』を生きることになる」という。

このような概念は、スケープゴートの被害者の心理療法において、特に心にとめておく必要があるのではないだろうか。傷を傷として、基盤のなさをなさとして受け止める。もしも仮に、基盤があったけれども欠損しているというのであれば、それを修復し、基盤を築き直していくこともできるであろう。しかし、多くの人が当たり前のように持っている基盤—内的な守りや外的な守り—が無いに等しいことが前提条件であるとき、その条件の中で—つまり、基盤がない中で—どう生きていくかという方向性を考えることも必要ではないだろうか。また、心理療法家は、彼らが経験している想像を超えた実存的孤独感に持ちこたえられず、基盤の無さや空虚感について、それが埋まらないものであると認識することを避けてそれを埋めようとはならない。そんなことをしてしまうと、彼らは、自分たちのこれまでの生き方をきちんと受け入れてもらえなかったと感じ、真の自己受容を見出せず、自らのアイデンティティの形成へと向かうことができなくなってしまふ。

スケープゴートと同一化していた人々が、辺縁を主体的に生きるトリックスターの存在というアイデンティティを得ていくプロセスにおいては、「回復されることのない空虚を生きぬくことで自らを成り立たせる」(秋田、2001)というあり方や、「不安定を安定へと変えようとするのではなく、不安定の中でバランスをとりながら生きようとする」姿勢が、獲得されていくように思われる。つまり、「空虚感」や「欠落感」、そして「あらゆるものが定位せず根付かないこと」はすべて、無くなったり取り除かれたりするのではなく、それらをすべて取り込む形で、「辺縁を主体的に生きるトリックスターの存在」というアイデンティティへと収斂されていく。これは、先の例でいうと、泥棒というアイデンティティを捨てるのではなく、それを押し付けられたものとしてではなく主体的に選ぶという形でアイデンティティへと組み入れられていくところと共通している。

また、逆説的だが、彼らが、「基盤(土台)の無い不安定感」を抱えながらもそこで生きていくことに意味を見出し、辺縁を漂いながら生きるというアイデンティティを受け入れることによって、「不安定における安定」や、「基盤の無さという基盤」が得られるようにも思われるのである。

(3) 「影」との新しい関係

「3.『スケープゴート』にされるという経験が及ぼす影響(3)『集合的な影』を見続けること」において、虐待やいじめの被害者が、集合的な影の犠牲者でもあり目撃者でもあるという経験から、集合的な影に対して、過剰な責任を負おうとすることを指摘した。「スケープゴートにして救世主」(Perera,1986)とは、スケープゴートと同一化しているときの、彼らのアイデンティティを端的に表している。

このようなアイデンティティは、彼らがスケープゴートとの同一化から逃れていくプロセスにおいて、「何が受け入れられて、何が受け入れられないか」という自己主張ができるようになる(「いや」が言えるようになる)につれて変わっていく。つまり、「いや」という主張は、集合的な影に対して「それは自分には背負えない」あるいは、「それは自分が背負うものではない」と主張することだとも言える。彼らにとって、「個」としての欲求を主張するということは大変に難しいことであるが、これができるようになることが、スケープゴートとの同一化から逃れることを意味すると同時に、「集合的な影」を過剰に背負うことから身を引くことをも意味するのである。

また、このことは逆に言うと、集合的な影ではなく自身が個として背負うべき「個人的な影」を認識し、それを背負うことを受け入れることを意味する。Perera(1986)も、スケープゴートとの同一化から逃れるプロセスに際しては、影のレベルを認識し、「個人的な影内容と集合的な元型的な影内容との相違を認識する」必要性を指摘している。そして、Neumann(1948)が言うように、自分の影を普遍的な影から区別することは自己認識の本質的な部分である。それによって、人は等身大の自分を認識し、受け入れて行動することができるようになるのである。このように、自分が背負える個人的な影を識別し、等身大の自分を認識することが、スケープゴートとの同一化から逃れることの本質的な部分を占めている。

しかしまた一方で、ある被虐待児が心理療法において、「戦争、なんで起こるん？」と真剣に問い、自我肥大によってではなく、人間の「集合的な影」をしかと見据えたように、スケープゴートとの同一化に苦しむ人は「影」に対して、人並み以上の関心と深い洞察を寄せるように思う。そのことについては、Perera(1986)が、スケープゴートとの同一化に苦しむ人がそこから癒されていくプロセスにおいて、影や苦しみを知り尽くし、そのときに悪に対しての人並み以上の洞察が伴われる、と指摘していることと重なる。さらにPerera(1986)によると、治療プロセスにおいては、「個人的な影」と「集合的な影」を識別するのみならず、「集合的な影」の中のレベル分け—相対的な悪と絶対的な悪を分けること—が生じるという。このこと

を説明するにあたって、Pereraは、スケープゴートとの同一化に苦しんできたある女性の夢を提示している。その夢を示すと以下ようになる。

「私はうちの配水管をすっかり清掃しました。それから配水管を辿って外へ出ます。それは肥料工場へ通じています。町の家の一軒一軒からパイプが出ています。下水と糞便はみな三つの大きなドラム缶に流れこみ、加熱されます。それから畑を肥やす肥料としてシャベルですくいだされます。ドラム缶には残存物があります—黒い残り滓です。それは真直ぐな特殊管をとって、海のなかにある穴へ流し込まれます」。(Perera,1986)。

この夢を通して、集合的な影の中には、しかるべき形で意識的に扱われたとき、周囲に撒いてものを育てる肥料にもなりうる「相対的な悪」があることが分かるという。しかしまた一方では、海の中にある穴（無意識）へと戻すしかない絶対的な悪もあり、それについては、いつかまた新しい形態で戻ってくるだろうが、今は、個人や集団が耐えることができないリビドーであり、「たかが人間がどれほど制御しようとしても、それを贖ったり変化させて解毒することなど不可能である」と認識する必要があるという。そして彼らは、このように、「集合的な影」のレベル分けをすると同時に、「相対的な悪に通じる集合的な影（傍点筆者）」には関わりを持ち、そのエネルギーを、集団を豊かにしてくれるものへと水路付ける役割を担うようになっていく、という。つまり、集団の影を投影されてそれを浄化する役割を押し付けられていたスケープゴートの被害者は、一旦、個人が担える影というものを識別して集合的な影を背負うことを拒否したあと、今度は主体的に、集団を豊かにすることに繋がるような「集合的な影—相対的な悪に通じるもの—」を担おうとする。

このようなあり方は、個としての欲求を持ち、個としての限界を認識しつつも、場（集団）を癒す役割を担う、というものである。このことは、先に触れたように、スケープゴートの被害者が自ら築いていくアイデンティティが、トリックスター的な救済という側面を有することと繋がってくる。繰り返しになるが、トリックスター（道化的存在）がもたらす救済とは、集団が抱える影を浄化して場の更新や成長を引き起こすことだと言え、強調しておきたいのは、彼らが、スケープゴートとして生贄に処されるというやり方ではなく、あくまで、「個」としての欲求や限界を認識しながら、「場」の更新や成長に主体的に関わるという点である。このように、「個」として生きながらも「場」の癒しに携わるという生き方に必要な態度を、筆者は以前「主体的受容性」と呼んだが（廣澤，2002）、そこには、「場」が抱える問題に身を投じてそこに関わりながらも、「個」として立脚し、「個」としての生を

生き抜き、その両義性を主体的に保持する強さが求められる。

このように、スケープゴートとの同一化に苦しんできた人々は、そこから脱却したあとも、影と特別な関係にあると言える。つまり、集合的な影に過剰に責任を負うことを放棄した上で、「影」への深い洞察に基づいて、今度は主体的に「影」の浄化に関わり、集団（場）を癒す役割を担おうとするのである。そしてこのような形で、彼らは辺縁を主体的に生きながらも、同時に「集団に復帰」（Perera, 1986）していると言うこともできる。

また、このような「影」との関係は、Neumann (1948) が指摘する「代理受苦」というあり方へも繋がるように思われる。すなわち、「個人が自らの悪を弱いものへと押しつけるスケープゴート心理とは違って、ここではむしろ反対の現象、すなわち、『代理受苦者』が登場する。そのような個人は集合的なものの重荷の一部を、自らの責任のうちに取り込み、自らの内側でなされる変容の営みを通して、この悪から毒性を除去し、それを統合するのである。もしそれに成功すれば、少なくとも当人のなかの悪からは救われるというそのことが、集合的なものの内部の救済に通じているのである。代理受苦者ならびに救済という問題は、倫理の領域と分ち難く結ばれている宗教の領域へとわれわれを深く立ち入らせる」(Neumann, 1948)。

「戦争、なんで起こるん？」と問うた被虐待児は、心理療法の初期において、自らを虐待した家族に対して「自分が面倒を見なければ」と過剰に責任を背負おうとしていたが、心理療法がすすむにつれ家族に対するはげしい怒りとやるせなさを表現するようになった。しかし、その後再び、施設から家族のもとへ帰ろうと思う、と述べた。それは、過剰に家族の影を背負おうという自我肥大による態度からではなく、スケープゴートとの同一化から逃れ、影を背負わされたことに伴う怒りや哀しみ（個としての感情）を認識した上で、再び、家族の問題を処理する（影を浄化する）役割を今度は主体的に担おうとしていたように感じられた。もちろん、現実的な問題から実際に家族のもとへ帰ることにはならなかったが、その後も施設において彼女は、自身の「個」としての欲求を言葉にする一方で（心理療法を始めた当初、彼女は場面緘黙であり、ほとんど誰とも話をしなかったが、心理療法のプロセスを経て話が出来るようになった）、集団（場）の抱える問題にいつも携わり、それを処理する役割を主体的に担おうとしていた。

スケープゴートにされるという経験によって最も傷ついた者が、「目には目を、歯には歯を」の論理でスケープゴートをする側に回るのでなく、この問題を解決するべく、集団においてもっとも苦しくももっとも

難しい役割—代理受苦という在りかた—を担い生きていこうとするという事実、筆者は畏敬の念を感じる。

Perera (1986) は、スケープゴートとの同一化に苦しんだ人は、そこから癒されたあとでさえ、「治ったスケープゴート」になれるだけであり、この問題そのものは解決しないと述べている。このことを筆者なりに解釈すると、スケープゴートとの同一化によって傷ついた人は、そこから癒された後も、集団（場）が抱える問題—「影」の側面—に関わりながら生きていくことになるが、「個」としての感覚を有し—自分がおかれている現状を認識したり自分の感情（苦しさや哀しさ）を感じ取ったりしながら—、主体的に「影」の浄化に関わるようになる、と言えるのではないだろうか。「個」として立脚しながら主体的に「場」の問題に関与するというあり方。彼らはスケープゴートにされているというのではなく、主体的にその立場に立つのである。それは、凡人には耐えることができないほどの、苦悩と忍耐を伴うことかもしれない。しかし、スケープゴートとの同一化に苦しむ人の心理療法のプロセスを通して、筆者は、彼らのところの中に、ここで述べてきたような形で「影」と新しい関係を結びながら生きようとする姿勢を感じる人が多い。だとすれば、心理療法においては、そのプロセスを、畏敬の念を持ちつつあるがままに見守り同行することが求められているように思われる。

5. おわりに

虐待やいじめの被害者（児）の心理療法を通して筆者がこれまで感じてきたことを、スケープゴートという視点からまとめた。そして、スケープゴートの被害に遭うということが彼らに及ぼす影響を、①スケープゴートとの同一化、②実存的孤独、③集合的な影を見続けること、という3点から論じ、さらに、彼らがその影響を踏まえたうえで自ら築いていくアイデンティティについて、①辺縁を主体的に生きていくこと～スケープゴートからトリックスターへ～、②基盤のなさを受け入れること、③影との新しい関係、という3点からまとめた。

その際、Perera (1986) の研究は大変示唆深く、非常に参考になった。しかし、Perera (1986) は、西洋文化（キリスト教という一神教を背景に持つ文化）におけるスケープゴートの問題という視点から論じており、多少違和感を持つところもあった。例えば、被虐待児の心理療法においてよく出てくる悪人、罪人、流人—泥棒、ヤクザ、乞食など—のイメージは、筆者には、人間の悪や穢れを体現して辺縁を漂いつつ全体を浄化する存在として、大変しっくりくるように思われ、あまり否定的なイメージが沸いてこない。それは、キリスト教には原罪という思想があり、「罪」や「悪」が明確なのに対し、日本の場合、原罪という思想はな

く、また、善と悪の関係がより流動的であることも関係しているかもしれない。

今後は、この辺りの宗教的背景による違いを加味した上で、スケープゴートという現象が個人のところに及ぼす影響を臨床心理学的に考察していきたいと思う。

6. 文献

- 秋田巖 「心理療法と人間—Disfigured Hiro試論—」『心理療法と人間関係』講座心理療法2001、第6巻、p.p.113-p.p.153.
- Herman, J.L., Trauma and Recovery, Harpercollins, Inc., New York, 1992. (中井久夫訳. 『心的外傷と回復』 みすず書房 1996).
- 廣澤愛子 「‘現代女性の自己実現’と‘女性性による癒し’に関する一考察～主体的受容性を巡って～」『大阪大学教育学年報』2002、vol.7 p.p.181-p.p.192.
- 廣澤愛子 「被虐待経験とてんかんを抱える女児との面接過程—スケープゴート・コンプレックスをめぐる—」『箱庭療法学研究』2003、vol.16(1) (現在印刷中).
- Jung, C.G., 'On the Psychology of the Trickster-Figure', The Collected Works of Jung, C.G., vol.9 (part1), Princeton University Press, 1954. (林道義訳. 『元型論』紀伊國屋書店 1999).
- 河合隼雄 『影の現象学』 思索社 1976.
- Neumann, E., Tiefenpsychologie und neue Ethik, 1948. (石渡隆司訳. 『深層心理学と新しい倫理—悪を超える試み—』人文書院 1987).
- 西田長男 三橋健 『神々の原影』 平河出版社 1983.
- Perera, S.B., The Scapegoat Complex—Toward a Mythology of Shadow and Guilt., Inner City Books, Toronto, 1986. (河東仁 田口秀明訳. 『スケートゴート・コンプレックス—影と罪の神話学への試み—』大明堂 1992).